

博士論文審査報告書

論文題目

建地割図と木割書の比較研究

A Comparative Study of Drawings and Architectural
Textbooks of Japanese Traditional Architecture

申請者

伏見	唯
Yui	FUSHIMI

建築学専攻 比較建築史方法研究

2015年2月

歴史上、建築の設計技術は、さまざまな手段で表出され、伝達されてきた。暗黙知的な傾向をたぶんに持つ大工の技術は、一子相伝や徒弟制度のなかで口伝されてきた歴史があり、今でもそうした性格はあるが、一方で口頭による伝達を補ったか、あるいは代役を務めたとも思われる、書物や絵図が散見される。そのひとつが、本論文の申請者が史料として扱った「木割書」と「建地割図」である。

木割書は絵図が添えられて描かれることもあるが、多くは文字だけが記された文書である。複雑な建築物を文章だけで表現しているため、その内容把握は容易ではなく、木割書は難解な資料となっている。その難解さは、先述の口伝、あるいは秘伝が十分に個人や組織間で疎通されていることを前提とすれば理解できるうえ、そうした文章だけで建築物を表現したところから、文書は独自の世界を築き、さらに翻って文書の展開が建築物にも影響を与える、という一時代の建築文化の特徴を呈したことも重要である。

また木割書は難解であるため、歴史的な設計技術を知るうえでは、そこに書かれている内容を読解すること自体が、十分に価値のある研究になる。したがって、木割書を読解を通した神社の設計方法の解明、多宝塔の設計方法の解明など、すでに豊富な成果がある。しかし一方で、そもそもそういった木割書が、どのように用いられたか、実際の建築生産のなかでどのような役割を担っていたかは具体的には明らかではなく、日本建築史にとって重要な根幹が未だに課題となっている。この課題は、建築生産の全史と向き合わなければならない、継続的な探究に向けての前進は不可欠であり、そのひとつの方法が、申請者が行った、大工が描いた立断面図である「建地割図」と「木割書」の比較考察である。

図面は木割書と同様に、実際に建てられる建築物とは一定の距離をもつ抽象的なものであるが、計画上のある種の意図や理想像であるため、両者を相互比較することで、理念と実践、施工時の誤差、実測斑、計画変更など、遺構のみでは得られなかった成果を得ることが期待できる。また本論文は、図面という異なる角度の他資料と比較することで、文書だけからはわからなかった新たな設計方法と木割書の役割の解明を志し、先述の課題の前進を目論んだものである。以下に審査の要旨を述べる。

本論文は序論、本論、結論から構成される。序論では、まずは「研究背景」として、先述のような建築を伝える媒体としての文章と図の広い問題提起を行い、そしてそれを踏まえたうえで木割書や建地割図をどのような性質の資料として捉えるべきなのか、という本研究の基本問題について論じている。そして続く「研究目的」では、それを踏まえた木割書研究の具体的な課題、「既往の木割書研究と本研究の意義」では、従来の研究の総覧とその中での本研究の位置付け、そして「研究の方法と史料」では、研究で扱う史料の紹介とその扱い方を述べている。

本論は二部構成であり、第一部の「各大工文書における比較研究」では、

日本中の大工文書を悉皆的に総覧したうえで申請者が見出した、後述する研究条件に適合するふたつの資料群を抽出し、それぞれについて木割書の記述と建地割図の描画の照合を行っている。続く第二部の「木割書にみられる描画的な設計方法」では、さまざまな大工文書の木割書と建地割図を通覧し、相互を見比べることで明らかとなる設計方法を複数明らかにしている。結論では、本論各部各章の結語を要約し、改めて全体を体系的にまとめている。

本論第一部第一章「大徳寺大工・林家」では、まずは比較研究するうえで、申請者が条件として設定した、同一の建物種別、および木割書と同一の筆者の図面を、膨大な文書群から探索し、その結果として4対の木割書と図面を紹介し、さらにそれぞれの照合関係を厳密に考定している。その成果として、建地割図と木割書とでは全体の形式が多くの部分で共通し、対応関係にあることを示し、なかでも部材の本数や「見通しに切る」のような描画的な表現による規定は、建地割図と木割書で内容が共通することが多いことなどを明らかにしている。また上記の論述の過程で、解釈が難解な文章表現でも、図面を通じることで具体的な納まりが判明することを説明している。さらに、同様に曖昧な基準値、あるいは補助線の位置などといった木割書だけでは判断が付きにくい箇所が、図面を見ることで明瞭化されていることを説得的に明示している。

第一部第二章「法隆寺大工・安田家」では、第一章と同様の操作を条件にあう史料である3対について行っている。ただし、前提として木割書の読解研究が進んでいない安田家の木割書においては、まず木割書の概要報告を行ったうえで、林家のものとおおよそ同様の傾向にあることを明らかにしている。さらに安田家の図面では、特徴的なヘラ引き跡がいくつも見られ、引通線や引渡線などの木割書では一般的に基準とされている線のヘラ跡や、尺杖を想起するような、積むことで建物の高さが分かる木割書の性質がよく反映されたヘラ引き跡も見られるとの報告はそれ自体興味深いもので、新しい知見を加えたと言えよう。

第二部第一章「各木割書における『地割』の記述」では、木割書と建地割図を比較する前提として、木割書に記されている「地わりニてがてんゆく」「地割のために爰こゝにしるす」などの「地割（図面）」の記述を初期の木割書から網羅的に抽出し、その箇所をまとめて報告している。木割書の筆者が、地割の存在を知ったうえで記していることがこのことから論証される、という申請者の指摘は重要である。

第二部第二章「賀茂別雷神社正殿の破風の刻み目」では、「はふノ筒下ハニテ壺分半切トメテホソクスルベキモノナリ」という木割書の難解な記述の意味を、建地割図をあわせて見ることで明らかにしている。この記述の意味は破風の下端にある刻み目のことである、ということを示した。

第二部第三章「重層建築における柱間遞減の設計方法」では、最古の木割書のひとつと考えられている『木碎之注文』から、十四世紀という他の初期

木割書の成立から二百年余り遡る極めて古い記述を抽出し、その内容と意味を論述している。その結果として、描画的な方法による柱間通減の設計方法を明らかにしている。その設計方法は、上下重の柱の位置関係による規定である「下重柱規定」、上重の柱と下重の組物との位置関係の規定である「下重組物規定」、柱径の寸法差による「柱径規定」および枝数分の寸法による「枝数規定」の4つである。層塔において従来知られていた垂木の枝数による通減規定とは異なる設計方法であり、新しい発見である。本章では、こうした従来知られていなかった設計方法を明らかにするとともに、その内容が記されている文書として、『木碎之注文』の史料価値を改めて提示したものである。

第二部第四章「木割書と建地割図における半唐様」では、木割書の記述だけではほぼ全体像を把握できない様式を、建地割図をあわせて見ることで明らかにしている。対象としたのは、和様と唐様の折衷様式であると思われる「半唐様」である。遺構のみにおいては折衷の仕方に定まりは必ずしも見出せないが、木割書に「半唐様」として記されていることから、一種の雛形だったと考えられる折衷様式の概念を試論的に論述している。

結論では、以上の各論を要約し、総括的に述べている。

以上要するに、まず第一部では、木割書と建地割図の筆者が同一の資料を日本中の大工文書から悉皆的に探索し、条件にあった資料についての詳細な比較研究を行った結果、対象資料の限りにおいては、おおよそ木割書と建地割図が同一の内容だと言ってよいことを明らかにし、さらに第二部では建地割図を描くことを念頭において執筆されたと考えられる木割書の記述や設計方法の事例を論述している。以上の第一部と第二部の考察から、史料数に限定はあるものの、少なくとも研究対象とした初期の木割書において、木割書の規定には、建地割図を描くために記されたか、建地割図と一緒に参照されることを想定した記述があることを明らかにしている。木割書と建地割図という2種の資料の性格が近く、かつ補完的であることが示された。

この成果は、木割書の役割の解明に向けた前進としては大きな意味を持ち、また図と文章という建築の伝達媒体という広い範囲の考察にも貢献するもので、建築学の発展に寄与するところ大である。よって博士（工学）の学位に値するものと認められる。

2015年1月

審査員（主査）	早稲田大学教授	工学博士（早稲田大学）	中川 武
	早稲田大学教授	博士（工学）早稲田大学	中谷礼仁
	早稲田大学准教授	博士（工学）早稲田大学	小岩正樹